

令和 5 年 6 月 16 日現在

機関番号：34509

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2022

課題番号：17K04510

研究課題名(和文) 自己認知と状況認知に支えられたメタ記憶の機能に関する実験的検討

研究課題名(英文) An experiment study on the function of metamemory based on self cognition and situational cognition

研究代表者

清水 寛之 (Shimizu, Hiroyuki)

神戸学院大学・心理学部・教授

研究者番号：30202112

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、人間が自己の記憶能力や記憶特性、知識状態をどのように認識し、記憶活動をいかに展開していくのかを個人の自己認知と状況認知に関連づけて実証的に明らかにすることである。一般大学生160名の実験参加者を対象に、個人ごとに(1)記憶実験と記憶検査による記憶能力とメタ記憶の測定、(2)質問紙調査による日常生活場面での記憶行動傾向とメタ記憶信念の把握、(3)質問紙調査と面接調査による自己認知と状況認知の同定、の3点に関する基礎的データを収集した。このデータをもとに、メタ記憶機能がより広範な自己認知と状況認知に支えられている可能性について理論的検討を行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義は、メタ記憶理論の拡張・精密化の作業を通じて、伝統的な実験室的記憶研究と近年精力的に行われている日常記憶研究との接合を図り、自己心理学の研究知見との融合を視野に収め、認知心理学に新たな理論的展開を迫る点にある。社会的意義として、本研究の知見が広範囲に及ぶ諸種の状況下での自己効力感や抑鬱感情の理解に新たな視点を提供する点が挙げられる。種々の疾病や外傷による記憶障害、加齢に伴う記憶能力減退などに対処するための記憶リハビリテーションプログラムの開発・改良に対して重要な貢献をなす。個人の記憶能力への適切な評価や改善点を本人にうまくフィードバックするためのシステム開発を促進する。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study was to empirically investigate how people monitor their own memory ability, memory traits and knowledge states. In addition, the study aimed to understand how people make use of the outcomes of such memory monitoring in order to effectively control memory activities in relation to self-cognition and situational cognition. One-hundred sixty university students individually participated in this study and provided the data of objective and subjective evaluations regarding to (a) memory activities and metamemory judgments in memory tasks and tests in experimental settings, (b) memory behavior and belief in every day life by means of questionnaires, and (c) self-cognition and situational cognition using questionnaires and face-to-face interviews. Based on these data, a possibility that human metamemory function was supported by a wide range of self-cognition and situational cognition was theoretically discussed in terms of memory monitoring and control processes.

研究分野：認知心理学

キーワード：記憶 問紙 メタ記憶 記憶モニタリング 記憶コントロール 記憶実験 日常記憶 記憶検査 メタ記憶質

## 1. 研究開始当初の背景

人は、進化の過程で他の種よりも複雑で多岐にわたる高次の記憶機能を獲得した。また、生涯発達の観点からも、生後まもなく人の記憶能力は急速に向上し始め、高齢期に至ってもなお知性を結晶化させ、一生涯を通じて多種多様な知識を大量に蓄積していくことが知られている。その一方で、私たちは日常生活場面をはじめ、さまざまな環境や状況の下で自らの記憶が不確かで不安定であることを実感することが多い。人は、加齢に伴う記憶能力の減退だけでなく、つねに「覚える」「思い出す」「忘れる」といった行為に関連した自己の精神機能（不全感や焦燥感、抑うつ感などを含む）に向き合わざるを得ない。

認知心理学的記憶研究では、個人が自身の記憶能力や記憶特性、知識状態を認識し、そうした認識に基づいて能動的に記憶活動を展開していく心理過程をメタ記憶 (metamemory) と呼んでいる。メタ記憶は、刺激対象への直接的な働きかけや意味抽出に関連した対象レベルと、対象レベルでの処理活動を支配・統括する上位のメタレベル、の2つのレベルから構成されている。将来の想起の必要性を自覚し、自己の記憶活動や記憶状態を監視・点検・確認すること（記憶モニタリング：「対象レベル」メタレベル」の情報の流れ）、課題場面や刺激材料の性質に応じて適切に記憶活動を制御・調整すること（記憶コントロール：「メタレベル」対象レベル」の情報の流れ）が含まれる（図1）。メタ記憶については、ここ40年ほどの間に精力的に数多くの重要な研究知見が報告されている。

本研究の研究代表者はこれまでに、一般成人（大学生）をはじめ、幼児を含むさまざまな年齢層の人たちや聴覚障害などの個人特性をもつ人たちを対象に記憶実験を行い、記憶モニタリングと記憶コントロールに関わる問題に取り組んできた。記憶モニタリングについては、実験室場面での記憶方略の有効性判断及び再生可能性判断を実験参加者に求め、それらのメタ記憶判断の正確度を評価する実験を行ってきた。記憶コントロールについてはリハーサルなどの記憶方略の有効性に関する実験を行ってきた。それらの実証的データを総合し、記憶コントロールと記憶モニタリングの機能に関する包括的なモデルの構成を試みてきた。近年は、特定の自伝的記憶に関する個人の主観的自己評価に関する尺度化の研究についても重要な研究知見を報告している。さらに、平成25～27（2013～2015）年度の科研費（基盤研究(C)）の助成を受けて、さまざまな記憶場面状況に合わせて個人がいかに記憶課題の成績を予測して記憶活動を展開しているかについて実験的に検討した。

## 2. 研究の目的

本研究は、これまでに蓄積された研究知見に基づいて、メタ記憶の機能性が個人の自己認知と状況認知の特性傾向に関連して理論的に拡張できる可能性があることに着目した。例えば、記憶実験や記憶検査において平均水準の課題成績を示す人たちのなかには自己に対する全般的な自己評価が低く、課題成績を過小に低く予測・評価する人たちがいる。しかし、そうした人たちは、日常生活場面では、記憶による失敗を回避すべく日頃から慎重に対処行動（きちんと予定表やメモを利用し、手遅れになる前に自発的に確認するなど）をとっている場合が少なくない。とくに自身にとっていかに重要な課題場面であるか、あるいは一般的な他者がどのように遂行するかといった認識（状況認知）に基づいて効果的な記憶行動が展開されるのかもしれない。つまり、記憶モニタリングや記憶コントロールは全般的な自己認知や状況認知に基づいて記憶場面状況ごとに調整されている可能性が考えられる（図1）。そこで、本研究は、メタ記憶の観点により記憶モニタリングの正確性と記憶コントロールの効果性が、記憶実験場面、記憶検査場面、

日常記憶場面、という3種類の記憶場面状況において個人の全般的な自己認知および状況認知とどのように関係しているかに焦点をあてる。一般成人（大学生）のみを対象とし、記憶実験、記憶検査、質問紙調査および面接調査の4点を同一の個人に対して実施し、基礎的な実証データを収集する。

実験室場面では心理学実験室において実験参加者に対して個別的に実験的記憶課題を与え、その成績を測定する。呈示される刺激材料はあらかじめ基準化された日本語の有意義言語材料（単語）を用いる。日本語単語の記銘学習を実験参加者の一人ひとりに課し、それぞれの記憶活動を記録しながら、その記憶保持の正確度を調べる。具体的には、認知心理学における伝統的な記憶実験課題である自由再生課題が用いられる。実際の再生成績と実験参加者による再生予測との一致・不一致の程度が実験室場面での記憶モニタリングの正確度として測定される。その際、実験参加者に対して自己の再生成績を予測させるだけでなく、一般的・平均的な大学生であれば、どれくらい再生できると思うかについても調べ、自己の成績の予測と一般的他者の成績の予測に関する差異についても検討する。そのあと、実験参加者がどのように自由再生課題に取り組んだのかを調べるために、下位リハーサル方略質問紙を与える。この質問紙には、10

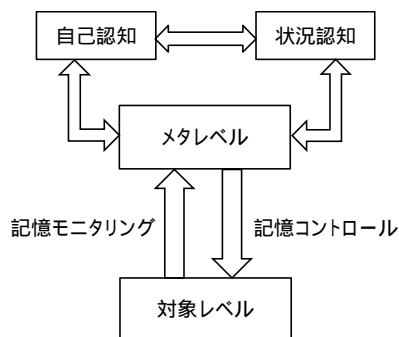


図1 本研究の理論的な枠組み

種類の下位リハーサル方略（単一反復、多重反復など）が記載されており、実験参加者が自由再生課題において呈示された刺激項目を実際にどのように記録しようとしたかについて、それぞれの下位リハーサル方略の主観的な使用頻度に関する評定を求め、これらの下位リハーサル方略に関する主観的頻度評定をもって実験室場面での記憶コントロールの効果性を検討する。

検査場面での個人の記憶能力を調べるために、臨床現場などで広く利用されている標準化されたウェクスラー記憶検査（Wechsler Memory Scale-Revised, WMS-R）を用いる。

日常生活場面での記憶能力と記憶行動に関するモニタリングの正確度を検討するために、代表的な4種類のメタ記憶質問紙（日常記憶質問紙, Everyday Memory Questionnaire, EMQ；

認知的失敗質問紙, Cognitive Failure Questionnaire, CFQ；記憶能力質問紙, Memory Ability Questionnaire, MAQ；成人用メタ記憶尺度, Metamemory in Adulthood questionnaire, MIA）を用いる。個人の全般的な自己認知と状況認知の特性傾向を調べるために、代表的な4種類の尺度（自意識尺度, Self-Consciousness Scale, SCS；状況的自己気づき尺度, Situational Self-Awareness Scale, SSAS；特性的自己効力感尺度, Generalized Self-Efficacy Scale, GSES；自己概念の明確性尺度, Self-Concept Clarity Scale, SCCS）を用いる。質問紙はいずれも日本語版を用いる。

以上のように、研究参加協力者に対して個別に実験・検査・調査を実施し、詳細な記憶実験・記憶検査での記憶成績とその自己評価、日常場面における記憶能力・記憶特性の自己評価、および全般的な自己認知と状況認知の特性傾向に関する実証データを包括的に収集し、それらに基づいてメタ記憶理論の再構築を図る。

### 3. 研究の方法

(1)実験参加者 近畿地方の1私立大学に在籍する学生160名が本実験に参加した（男性78名、女性82名；平均年齢21.2歳、標準偏差1.33、範囲20-27歳）。

(2)実験装置 実験室場面での刺激項目の呈示にはDell製PC、Optiplex780が用いられた。刺激項目の呈示に関する制御にはCedrus製ソフトウェアSuperLab4.0が用いられた。実験参加者への刺激呈示については、実験者の操作するPCのディスプレイとは別に、専用のNEC製24インチ液晶カラーディスプレイLCD-EA241WM）が用いられた。

(3)刺激材料 実験に用いられた刺激材料は、カテゴリー別出現頻度に関する基準表から、高頻度の単語を50個抽出し、各リスト10項目からなる記録項目リストを5リスト作成した。記録項目はリスト内でできるだけ意味的にも音韻的にも無関連になるように配列した。

(4)質問紙 実験室場面において実験参加者がどのように自由再生課題に取り組んだのかを調べるために、下位リハーサル方略質問紙を用いた。この質問紙には、次の10種類の下位リハーサル方略が記載されていた。単一反復、多重反復、イメージ化、リスト内連想、リスト外連想、単一項目による文章化、複数項目による文章化、物語化、カテゴリー化、類似による群化。これらの下位リハーサル方略のそれぞれについて「まったくしなかった」から「つねにしていた」までの5段階で評定することを求めた。

日常生活場面における記憶行動や記憶信念を調べるためのメタ記憶質問紙として、EMQ、CFQ、MAQ、MIA、の4種類の質問紙を用いた。EMQについては、日常生活場面での特定の記憶行動や記憶現象を表す記述文（全28項目）に対して「最近6ヶ月で1回もない」から「日に1回以上」までの9段階で出現頻度の評定を求めた。CFQについては、日常生活場面での認知的失敗に関連した出来事を表す記述文の一部（全25項目）に対して、過去6ヶ月の間で「まったくない」～「非常によくある」の5段階で出現頻度の評定を求めた。MAQについては、個人の全般的な記憶能力を表す記述文（全31項目）に対して「まったくあてはまらない」～「非常にあてはまる」の5段階で適合度の評定を求めた。MIAについては、自己あるいは一般人（一般的な他者）における特定の記憶行動や記憶信念を表す記述文（全44項目）に対して「まったくそのとおりだと思う」～「まったくそうは思わない」の、または「まったくしない」～「いつもする」の5段階で、それぞれ適合度または出現頻度の評定を求めた。

参加協力者の自己認知と状況認知の程度を調べるために、SCS、SSAS、GSES、SCCSの4種類の質問紙を用いた。いずれも、短い記述文（順に、21項目、9項目、23項目、13項目）に対して、それぞれ「まったくあてはまらない」～「非常にあてはまる」の7段階、「まったくそう思わない」～「まったくそう思う」の7段階、「そう思わない」～「そう思う」の5段階、「まったくあてはまらない」～「かなりあてはまる」の5段階で適合度の評定を求めた。

(5)記憶検査 個人の記憶能力を調べるためにWMS-Rを用いた。WMS-Rは13の下位検査から構成されているが、このうち「1.情報と見当識」については、実験参加者が健常大学生であり、あとの指標得点の算出には用いられないことから、質問の一部（「ここはどこですか？」など）の実施が割愛された。

(6)面接調査 個人の記憶能力および記憶行動特性に関する意識を調べるために半構造化面接を行った。主な質問項目は、自己の記憶機能の変化、自己の記憶能力の評価、自己の記憶行

動に伴う不安状態の評価、多用する記憶方略の種類と利用頻度、自己の記憶能力のコントロール感、に関するものであった。

(7) 全般的手続き すべての研究参加協力者に対して心理学実験室内で個別に「本研究の全般的説明 同意書への署名 記憶実験 メタ記憶質問紙調査 記憶検査 自己認知と状況認知に関する質問紙調査 記憶面接調査 謝礼金の書類作成」の順に実施した。途中で十分な休憩をとりながら、一人につき2時間程度を要した。本研究への参加協力の謝礼金は、一人あたり1760円～1860円であった（実施時期によって所属する大学の報酬規程が異なったため）。

(8) 実験手続き 実験参加者は、コンピュータ画面に継時的に視覚呈示される10個の単語を確実に記録することが求められた。次に、単語の呈示終了後に、できるだけ正確に、できるだけ多くの単語を再生することが求められた。そのような試行が全部で5回行われることが示され、全5試行終了後に別の簡単な作業を行ったあとに、呈示されたすべての単語の再生が求められることが教示された。各再生試行の終了後に、呈示された10個の単語のうち、あるいは自分が書き出した単語のうち、何個くらいを最後にもう一度思い出せると思うか、その個数を予測することが求められた。さらに、一般的・平均的な大学生であれば、どれくらい再生できると思うかについても予測することが求められた。

記録項目リストは、1項目につき4秒の割合で視覚呈示された。各項目リストの呈示終了後、1分間の直後自由再生テストが行われた。そのあとに、最終再生テストに関する再生成績の予測が行われた。「記録項目リストの呈示 直後再生テスト 最終再生成績の予測（自己、一般的他者）」という手続きが5試行行われ、試行間隔は約1分であった。最後の試行において、呈示されたリスト項目に対する最終再生成績の予測がなされたあとに、妨害作業である3桁数字の逆算課題が30秒間行われた。その後、呈示された全リスト項目についての最終再生テストが3分間にわたって行われた。自由再生課題の終了後に、実験参加者に対して下位リハーサル方略に関する質問紙が与えられ、自己ペースで回答することが求められた。

(9) 質問紙調査手続き 質問紙調査は実験に引き続いて行われた。メタ記憶についてはEMQ、CFQ、MAQ、MIAの4種類のメタ記憶質問紙が与えられた。自己認知および状況認知の特性傾向についてはSCS、SSAS、SES、SCCの4種類の自己意識関連の質問紙が与えられた。いずれも自己ペースで回答することが求められた。

(10) 検査手続き 質問紙調査に引き続いてWMS-Rが実施された。WMS-Rの13の下位検査のうち「4. 論理的記憶」、「5. 視覚性対連合」、「6. 言語性対連合」、「7. 視覚性再生」については、後続のそれぞれの遅延課題において完全正答を100パーセントとした場合に、およそ何パーセントくらいの成績をあげることができるのかの予測が求められた。さらに、それらの下位検査については、一般的・平均的な大学生であれば何パーセントくらいの成績をあげると思うかという予測も求められた。

(11) 面接調査手続き すべての記憶実験・記憶検査・質問紙調査を終えたあとに、前述の5つの質問項目を中心とした半構造化面接による調査が行われた。すべての言語反応は録音された。

#### (12) 評定反応の得点化と分析方法

記憶実験については、従来の分析方法に合わせて、自由再生課題における直後再生テスト及び最終再生テストの成績を算出した。さらに、最終再生成績の予測についても同様の集計・整理を行った。下位リハーサル方略質問紙については、各項目への「まったくしなかった」～「つねにしていた」の5段階の評定反応に対して、順に0～4の得点が与えられた。

メタ記憶質問紙調査で得られた回答に対して以下の得点化が行われた。EMQについては「最近6ヶ月で1回もない」～「日に1回以上」の9段階、CFQについては「まったくない」～「非常によくある」の5段階、MAQについては「全くあてはまらない」～「非常にあてはまる」の5段階、MIAについては「まったくそのとおりだと思う」～「まったくそうは思わない」の5段階または「まったくしない」～「いつもする」の5段階、のそれぞれの評点反応に対して上記の質問紙の順に1～9、0～4、1～5、1～5の点数が与えられ、得点化された。

自己認知と状況認知に関する質問紙で得られた回答に対して以下の得点化が行われた。SCSについては「全くあてはまらない」～「非常にあてはまる」の7段階、SSASについては「まったくそう思わない」～「まったくそう思う」の7段階、SESについては「そう思わない」～「そう思う」の5段階の評定反応に対して、SCCについては「まったくあてはまらない」～「かなりあてはまる」の5段階、のそれぞれの評定反応に対して上記の質問紙の順に1～7、1～7、1～5、1～5の点数が与えられ、得点化された。

WMS-Rでは、専用の記録用紙に13の下位検査ごとの反応を記録し、検査マニュアルに従って粗点が算出された。下位検査ごとの粗点は所定の重みづけがなされ、それらの重みづけられた粗点をいくつか組み合わせて合成得点が算出された。その合成得点から、年齢群別の指標得点への換算表に基づいて、一般的記憶、言語性記憶、視覚性記憶、注意/集中力、遅延再生という5つの指標得点が算出された。

面接調査によって得られた音声反応(発話)記録データはすべて文書に書き起こし、質問項目ごとに内容をカテゴリーに分類した。

(13)倫理的配慮 研究代表者の所属する神戸学院大学の「ヒトを対象とする研究等倫理委員会」の事前審査を申請し、2017年7月に承認を受けた(承認番号 SEB17-11)。その後、研究期間の延長に伴って、その都度審査を受け、承認された(承認番号 HP19-16, SP20-25, SP21-31)。すべての参加協力者に対して、実験・調査・検査の参加に関するさまざまな権利を保障する文書を示し、そうした理解のうえで本研究への参加協力に同意する文書を研究者との間で取り交わした。

#### 4. 研究成果

本研究の主要な結果は、次のとおりである。

自由再生課題における最終再生の再生項目数の予測については、再生試行の経過に従って過大予測から過小予測へと変化していった。そうした変化の傾向は、自己の成績予測だけでなく、一般的他者の成績予測の場合も同様であった。どの試行でも自己の成績の予測値は一般的他者の成績の予測値よりも有意に低かった(図2)。

自由再生課題における直後再生成績、最終再生成績、最終再生予測(自己)および最終再生予測(一般的他者)の4つの指標間の相関を求めたところ、最終再生成績の良い者ほど自己の最終再生成績を高く予測するものの、一般的他者の最終再生成績を高く予測するわけではなく、自己および他者の最終再生成績の予測の正確度が高いことが示唆された。

自由再生課題終了後に実験参加者に下位リハーサル方略の使用頻度に関する質問紙への評定を求め、その評定結果と直後再生成績、最終再生成績、最終再生予測(自己)および最終再生予測(一般的他者)との関係を重回帰分析により検討した。その結果、直後再生成績には、単一反復、リスト内連想、多重文章化といった下位リハーサル方略の使用が影響していた。最終再生成績の場合、単一反復、リスト内連想および物語化の使用頻度の影響が見られた。しかしながら、最終再生予測(自己)は下位リハーサル方略の使用頻度の多少によって説明することはできず、最終再生予測(一般的他者)は単一文書化と多重文章化の使用頻度の影響が見られた。

EMQ、CFQ、MAQ、MIAの4種類のメタ記憶質問紙への回答結果について、先行研究による因子分析結果をもとに、因子ごとの実験参加者の平均評定値を算出し、記憶実験での直後再生成績、最終再生成績、最終再生予測(自己)および最終再生予測(一般的他者)との間の相関を分析したところ、いくつかのメタ記憶質問紙の特定の因子において記憶実験における再生成績および再生成績予測および成績予測の正確度との間に有意な相関が見られた。

記憶検査における下位検査課題の成績予測について、全般的に過小予測の傾向が認められ、自己の成績予測は一般的他者の成績予測に比べて総じて低い、課題によってはズレがほとんど見られないものもあった。

自己認知と状況認知に関する質問紙への評定結果について記憶実験と記憶検査の成績・予測との関係を調べたところ、自己認知と状況認知の程度が一部の記憶実験と記憶検査の成績・予測の高低あるいは成績予測の正確度との間に有意な相関が認められた。

自己の記憶機能の変化や記憶能力の評価などに関する面接調査を通じて、メタ記憶質問紙の結果と合わせて、個人のメタ記憶に関連した特性傾向には個人差が大きく、日常生活場面での記憶能力の減退や特定の記憶課題への苦手意識、忘却や失念への対処方略についても多様性が高いことが示唆された。

これらの研究結果を通して、先行研究の結果から一貫して、少なくとも本研究で取りあげた実験室場面、検査場面、日常生活場面という記憶場面状況において一般成人の記憶コントロールと記憶モニタリングに反映されるメタ記憶には、実際の記憶成績との間に、いくつかの特徴的な乖離が認められ、それらに対して全般的に自己認知と状況認知が関与していることが明らかになった。実験室場面や検査場面において課題成績を正確に予測する者が必ずしも日常生活場面での記憶行動を効果的に調整しているとは限らなかった。むしろ、自己の課題成績を実際よりも低めに予測する者は記憶検査の成績が良好で、実際には記憶能力が高いという可能性が認められた。したがって、従来のメタ記憶の機能的役割について、自己の記憶能力や一般的な他者の記憶能力をどのように捉えているのかという観点から再検討すべきであると考えられる。今後の検討課題として、より広範な年齢層の人たちを対象に、引き続き、同一の個人から実験室場面、検査場面、日常生活場面での実際の記憶成績や記憶行動、記憶成績予測などに関する基礎的な実証データを収集し、生涯発達の観点からもメタ記憶理論の再構築に向けて精緻な議論を積み重ねていくことが望まれる。

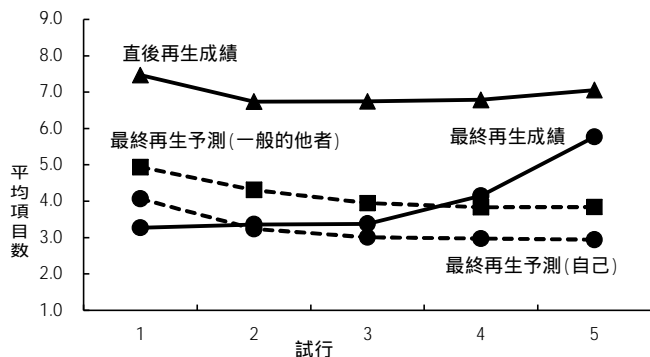


図1 自由再生課題における自己の成績の予測と一般的他者の成績の予測

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計17件（うち査読付論文 16件 / うち国際共著 4件 / うちオープンアクセス 13件）

1. 著者名 清水 寛之	4. 巻 5
2. 論文標題 記憶検査の成績予測の正確度と認知的失敗傾向の関係 - 改訂版ウエクセラ-記憶検査 (WMS-R) と認知的失敗質問紙 (CFQ) による検討	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 神戸学院大学心理学研究 = Kobe Gakuin University Journal of Psychology	6. 最初と最後の頁 9~21
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.32129/00000284	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 ANDERSON David, SHIMIZU Hiroyuki, MASSAM Winston	4. 巻 64
2. 論文標題 GENERATIONAL DIFFERENCES BETWEEN YOUNGER AND OLDER JAPANESE ADULTS IN PERCEPTIONS OF SOCIETY FROM RETROSPECTIVE, CURRENT, AND FUTURE TIME PERSPECTIVES	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 PSYCHOLOGIA	6. 最初と最後の頁 69~93
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.2117/psysoc.2021-A166	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 清水 寛之	4. 巻 4
2. 論文標題 記憶検査の成績予測の正確度と時間的展望の関係 - 改訂版ウエクセラ-記憶検査 (WMS-R) と時間的展望尺度 (ZTPI) による検討 -	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 神戸学院大学心理学研究 = Kobe Gakuin University Journal of Psychology	6. 最初と最後の頁 3~14
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.32129/00000226	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Anderson, D., Shimizu, H., Liu, Y., & Grover, R.	4. 巻 40
2. 論文標題 Psychological factors influencing the vividness and affect visitors' recall of nostalgic life memories in museums at Showa-Era Museum	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Current Psychology	6. 最初と最後の頁 3585-3595
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1007/s12144-019-00299-6	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 Anderson David、Shimizu Hiroyuki、Iwasaki Shota	4. 巻 64
2. 論文標題 Recollections of Who We Were: Nostalgic Retrospective Perceptions of Japanese Society Following a Visit to a Sh?wa era Museum	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Curator: The Museum Journal	6. 最初と最後の頁 17~40
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1111/cura.12401	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 清水寛之	4. 巻 3
2. 論文標題 日常生活場面における記憶能力の自己評価と時間的展望の関係 - 記憶能力質問紙 (MAQ) とジンバルドー時間的展望尺度 (ZTPI) の因子間の相関分析 -	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 神戸学院大学心理学研究	6. 最初と最後の頁 31-41
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.32129/00000156	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 堤 聖月・清水寛之	4. 巻 91
2. 論文標題 自伝的記憶における想起された出来事の特徴と忘却への懸念との関係	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 心理学研究	6. 最初と最後の頁 332-338
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.4992/jjpsy.91.19325	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 清水 寛之	4. 巻 2
2. 論文標題 日常生活場面における認知的失敗傾向と記憶自己効力感の関係 - 認知的失敗質問紙 (CFQ) と成人用メタ記憶尺度 (MIA) の因子間の相関分析 -	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 神戸学院大学心理学研究 = Kobe Gakuin University Journal of Psychology	6. 最初と最後の頁 21~29
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.32129/00000098	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 富高智成・白川雅之・因來愛実・高橋雅延・清水寛之	4. 巻 58
2. 論文標題 健忘症患者の日常記憶に関する自己評価 - 1事例におけるメタ記憶質問紙への反応と神経心理学的検査結果の1年間の変化 -	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 行動科学	6. 最初と最後の頁 39-50
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大谷多加志・清水里美・郷間英世・大久保純一郎・清水寛之	4. 巻 30
2. 論文標題 幼児におけるじゃんけんの勝敗判断に関する発達段階の評価	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 発達心理学研究	6. 最初と最後の頁 142-152
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 清水寛之	4. 巻 1
2. 論文標題 日常生活場面における認知的失敗行動の自己評価と時間的展望 - 認知的失敗質問紙 (CFQ) とジンバルドー時間的展望尺度 (ZTPI) の関係 -	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 神戸学院大学心理学研究	6. 最初と最後の頁 33-41
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 清水寛之	4. 巻 38
2. 論文標題 日常場面におけるメタ記憶と時間的展望 - 日常記憶質問紙 (EMQ)、成人メタ記憶尺度 (MIA)、および時間的展望尺度 (ZTPI) による分析 -	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 人文学部紀要 (神戸学院大学人文学部)	6. 最初と最後の頁 103-120
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -



1. 著者名 Anderson David、Shimizu Hiroyuki、Iwasaki Shota	4. 巻 60
2. 論文標題 Memories of Manga: Impact and Nostalgic Recollections of Visiting a Manga Museum	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 Curator: The Museum Journal	6. 最初と最後の頁 505 ~ 525
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1111/cura.12248	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 該当する

[学会発表] 計25件(うち招待講演 0件/うち国際学会 1件)

1. 発表者名 Anderson, D., Shimizu, H., & Massam, W.
2. 発表標題 Retrospective, current and future perceptions of society among young and old Japanese adults
3. 学会等名 The 32th International Congress of Psychology (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 中田英利子・富高智成・向居 暁・清水寛之
2. 発表標題 失敗のエピソードに関する調査研究(1)
3. 学会等名 日本教育心理学会第63回総会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 富高智成・中田英利子・向居 暁・清水寛之
2. 発表標題 失敗のエピソードに関する調査研究(2)
3. 学会等名 日本教育心理学会第63回総会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 清水寛之
2. 発表標題 記憶検査の成績予測の正確度と時間的展望の関係 - 改訂版ウエクスラー記憶検査 (WMS-R) と時間的展望尺度 (ZTPI) による検討 -
3. 学会等名 日本心理学会第85回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 毛 新華・清水寛之・木村昌紀
2. 発表標題 中国の在留邦人の文化適応課題に関する探索的調査
3. 学会等名 日本心理学会第85回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 富高智成・中田英利子・向居 暁・清水寛之
2. 発表標題 自己と他者における失敗エピソードの記憶 (1) 共起ネットワーク分析を用いた検討
3. 学会等名 日本心理学会第85回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 中田英利子・向居 暁・富高智成・清水寛之
2. 発表標題 自己と他者における失敗エピソードの記憶 (2) 大学生の年齢群別の対応分析
3. 学会等名 日本心理学会第85回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 向居 暁・富高智成・中田英利子・清水寛之
2. 発表標題 自己と他者における失敗エピソードの記憶(3) 失敗の生起時期に関する分析
3. 学会等名 日本心理学会第85回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 中田英利子・向居 暁・富高智成・清水寛之
2. 発表標題 自己と他者における失敗エピソードの記憶(4) 想起された失敗直後の感情価に関する分析
3. 学会等名 日本パーソナリティ心理学会第30回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 清水寛之
2. 発表標題 標準化された記憶検査における実際の成績と予測された成績の関係 - 改訂版ウエクスラー記憶検査(WMS-R)とリバーミード行動記憶検査(RBMT)による検討 -
3. 学会等名 日本認知心理学会第19回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 中田英利子・富高智成・向居 暁・清水寛之
2. 発表標題 自己と他者における失敗エピソードの記憶(5) 想起された失敗直後の感情と思考に関する対応分析
3. 学会等名 日本発達心理学会第33回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 山本晃輔・榎 洋一・瀧川真也・清水寛之
2. 発表標題 自伝的記憶特性質問紙(AMCQ)日本語版開発の試み(3) - 心理的well-being尺度, SNSを用いた妥当性の検討 -
3. 学会等名 日本発達心理学会第33回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 清水寛之
2. 発表標題 実験室場面における記憶成績の予測と日常場面における時間的展望
3. 学会等名 日本心理学会第84回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 清水寛之
2. 発表標題 日常生活場面での記憶自己効力感と検査室場面での記憶成績の予測
3. 学会等名 日本認知心理学会第18回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 中田英利子・富高智成・向居 暁・清水寛之
2. 発表標題 失敗の認知と記憶に関する調査研究(1) - 感情価に基づく失敗の意味の分析 -
3. 学会等名 日本心理学会第84回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 富高智成・向居 暁・中田英利子・清水寛之
2. 発表標題 失敗の認知と記憶に関する調査研究(2) - 失敗の意味に関する自由記述データの共起ネットワーク分析 -
3. 学会等名 日本心理学会第84回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 富高智成・向居 暁・中田英利子・富高智成・清水寛之
2. 発表標題 失敗の認知と記憶に関する調査研究(3) - 失敗の意味に関する自由記述データの性別・年齢に関する対応分析 -
3. 学会等名 日本心理学会第84回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 山本晃輔・榎 洋一・瀧川真也・清水寛之
2. 発表標題 自伝的記憶特性質問紙(AMCQ)日本語版開発の試み(1)
3. 学会等名 日本認知心理学会第18回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 山本晃輔・榎 洋一・瀧川真也・清水寛之
2. 発表標題 自伝的記憶特性質問紙(AMCQ)日本語版開発の試み(2) - 自己定義記憶による想起課題を用いた検討 -
3. 学会等名 日本発達心理学会第32回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 清水寛之
2. 発表標題 日常場面での認知的失敗の自己評価と検査室場面での記憶成績の予測
3. 学会等名 日本認知心理学会第17回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 清水寛之
2. 発表標題 日常生活におけるメタ記憶と時間的展望 - 記憶能力質問紙 (MAQ), 成人メタ記憶尺度 (MIA), および時間的展望尺度 (ZTPI) の関係 -
3. 学会等名 日本心理学会第83回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 清水寛之
2. 発表標題 日常生活における記憶行動の自己評価と検査室場面における記憶成績の予測との関係
3. 学会等名 日本認知心理学会第16回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 清水寛之
2. 発表標題 日常場面における認知的失敗行動の自己評価と時間的展望 - 認知的失敗質問紙 (CFQ) と時間的展望尺度 (ZTPI) の関係 -
3. 学会等名 日本心理学会第82回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 清水寛之
2. 発表標題 記憶場面状況に応じたメタ記憶の機能の分析 - 実験室場面での再生予測とリバーミード行動記憶検査の成績との関係 -
3. 学会等名 日本認知心理学会第15回大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 清水寛之
2. 発表標題 記憶検査場面における実際の成績と測された成績 - 改訂版ウエクスラー記憶検査とリバーミード行動記憶検査を用いた検討 -
3. 学会等名 日本心理学会第81回大会
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計6件

1. 著者名 フランク・ファランダ (清水寛之・井上智義 (監訳) 松矢英晶 (訳))	4. 発行年 2021年
2. 出版社 ニュートンプレス	5. 総ページ数 168
3. 書名 「恐怖」のパラドックスー安心感への執着が恐怖心を生む	

1. 著者名 ステファン・ファン・デル・スティッヘル (枝川義邦・清水寛之・井上智義 (監訳) 徳永美恵 (訳))	4. 発行年 2021年
2. 出版社 ニュートンプレス	5. 総ページ数 152
3. 書名 人生を変える集中力の高め方 - 集中力が劇的に向上する6つの話	

1. 著者名 ステファン・ファン・デル・スティッヘル(清水寛之・井上智義(監訳)藤井良江(訳)) 良江	4. 発行年 2021年
2. 出版社 ニュートンプレス	5. 総ページ数 168
3. 書名 注意を操る心理学 - 気が散ることだらけの現代で自分を保つには	

1. 著者名 佐野真由子(編)	4. 発行年 2020年
2. 出版社 思文閣出版	5. 総ページ数 556
3. 書名 万博学	

1. 著者名 松田修(編著)	4. 発行年 2018年
2. 出版社 ワールドプランニング	5. 総ページ数 234
3. 書名 最新老年心理学 - 老年精神医学に求められる心理学とは -	

1. 著者名 Tsukiura, T. & Umeda, S. (Eds.)	4. 発行年 2017年
2. 出版社 Springer	5. 総ページ数 327
3. 書名 Memory in a social context: Brain, mind, and society	

[ 産業財産権 ]

[ その他 ]

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----



7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
カナダ	University of British Columbia			